

“tact”に関する哲学的考察—南方熊楠の言説から—

唐澤太輔（IRCP 客員研究員）

みなかたくまぐす

要旨：博物学者・民俗学者として知られる南方熊楠（1867～1941年）は、いくつかの書簡において、“tact”という語を用い、「やりあて」（熊楠の造語）という、単なる偶然の域を超えた発見や発明・的中といった事象について説明している。しかし、熊楠自身、この“tact”を重要視しながらも「うまく訳すことができない」と述べ、事例を列挙するばかりである。

“tact”は、ラテン語の“tactus”すなわち〈触覚〉を語源とする。本稿では、熊楠の言う“tact”について、まずは語源から探り、その上で、彼の示す事例を考察していく。熊楠は、薬品調合や、石工あるいは芸妓の技を“tact”による「やりあて」の事例として挙げている。これらは〈触覚〉という観点から考えた場合、非常にわかりやすい。一方で、熊楠は、いわゆる「夢告」による生物等の発見も“tact”による「やりあて」だと述べている。彼の中で、夢というヴィジョンと〈触覚〉はどのようにかかわっていたのであろうか。この点について、熊楠による夢に関する記述の特徴から考察する。

最後に、“tact”が最大限に発揮された場合、どのような「次元」が開かれるのか、坂部恵（1936～2009年）の言う〈触覚〉による相互浸透をキーワードに論じる。

キーワード：tact、触覚、やりあて、粘菌、相互浸透

1 はじめに—「やりあて」と“tact”—

南方熊楠（博物学者、民俗学者、生物学者、1867～1941年）は、いくつかの書簡の中で“tact”という言葉を用いている。例えば、友人の真言僧・土宜法龍（1854～1923年）どぎほうりゅうに向かって、以下のよう述べている。

現に今の人にも tact というがあり。何と訳してよいか知れぬが、予は久しく顕微鏡標品を作りおるに、同じ薬品、知れきったものを、一人がいろいろとこまかくはか斗りて調合して、よき薬品のみを用うるもたちまち敗れる。予は乱妨にて大酒などして、むちゃに調合し、その薬品の中に何が入ったか知れず、また垢だらけの手でいろうなど、まるでむちゃなり。然れども、久しくやっておるゆえにや、予の作りし標品は敗れず。

（1903年7月18日付土宜法龍宛書簡）〔往復書簡（土宜宛）：309〕

ここで熊楠は、“tact”を「何と訳してよいか知れぬ」と言い、続いて、標本用の薬品調合の事例を挙げている。彼は、この頃、那智山に孤居し（通称：那智隠栖期）、キノコや隠花植物、そして粘菌（変形菌、真正粘菌）などを精力的に採集・観察していた。そして熊楠は、それらの生物の標本を制作する際、酒を飲みながら、また垢だらけの手指であっても、しっかりとした薬品調合ができると述

べている。またその結果、自分は他の人より立派な標本を作ることができるとも述べている。

生物標本を作ったことがある者であれば分かるであろう。標本にできそうな生物の選定や、腐敗等を防ぐための薬品調合、そして小箱に収める作業等には、相当な集中力が必要である。普通は、酒を飲みながらできるものではない。その作業は、標本自体を傷つけたり汚したりしないように細心の注意を払いながら行われねばならない。しかし熊楠は、それらを特に強く意識せずとも自分にはできてしまう、ということ述べている。どうやら彼は、無意識的に、そして身体感覚をもって行うことができる「何か」を、“tact”と述べているようである。

熊楠は、以下のように続ける。

この「久しくやっておるゆえ」という語は、まことに無意味の語にて、久しくなにかを気をつけて改良に改良を加え、前度は失敗せし廉を心得おき、用心して避けて後に事業がすすむなら「久しくやったゆえ」という意はあり。ここに余のいうは然らず。何の気なく、久しくやっておると、むちゃはむちやながら事がすすむなり。これすなわち本論の主意なる、宇宙のことは、よき理にさえつかまえ^{あた}申れば、知らぬながら、うまく行くようになっておると言うところなり。

(1903年7月18日付土宜法龍宛書簡) [往復書簡(土宜宛): 309-310]

例えば、長年実験を重ね、データとしてそれらをまとめ、数値化した結果であれば「久しくやったゆえ」と言えるかもしれないが、熊楠がここで言おうとしていることはそのような事柄ではない。つまり彼は、そのような成功・失敗のデータをいちいち取り、意識しながら改良に改良を重ねなくとも、継続によって、宇宙の事柄は大抵うまく進むようにできていると述べているのだ。しかしながら、それを自分自身でもうまく意識化し、さらに言語化することは難しいと言う。

故にこの tact (何と訳してよいか知らず。石きり屋が長く仕事をするときは、話しなら白の目を正しく実用あるようにきるごとし。コンパスで斗り、筋をひいてきつたりとて実用に立たぬものできる。熟練と訳せる人あり。しかし、それでは多年ついやせし、またはなはだ精力を勞せし意に聞こゆ。) 実は「やりあて」(やりあてるの名詞とでも言ってよい) ということは、口筆にて伝えようにも、自分もそのこと知らぬゆえ(気がつかぬ)、なんとも伝うることならぬなり。されども、伝うることならぬから、そのことなしとも、そのこと用なしともいいがたし。

(1903年7月18日付土宜法龍宛書簡) [往復書簡(土宜宛): 310]

熊楠は、ここで、石切り屋(石工)は、話をしながらでも白の目を正確にきることができると述べている。見習いや素人が、一生懸命コンパスを使って筋を引いてから切ってもうまいかない「それ」を、何故かうまくできてしまう石工がいると言うのだ。そして、この言語化も意識化も容易ではない(口筆にて伝えようにも、自分もそのこと知らぬ)が、ある事を遣り^や果す^{おお}ことを、彼は「やりあて」

と名付けている¹⁾。そして熊楠は、それは、言語化・意識化できない以上、基本的に、他人に正確に伝えることはできないが、だからと言って「そのことなし」とも「そのこと用なし」とも言うことはできないと付け加えている。上記に続く文章では、それは「偶然といわんにも偶然にはあらず」[往復書簡（土宜宛）：310]と述べている。さらに「発見ということは、予期よりもやりあての方が多くなり」[往復書簡（土宜宛）：310]とも言っている。つまり、何かを発見するという事は、綿密な分析やデータ（熊楠がここでいう「予期」）によるものも勿論あるが、それよりも、概して「やりあて」の方が多いのではないかというのが、ここでの彼の見立てである。

ここまでの熊楠の言説をまとめてみよう。熊楠は、“tact”が発揮される事例として、自分の標本制作時の薬品調合や、石工がうまく臼の目を切ること等を挙げ、それらは「やりあて」であると述べている。「やりあて」とは、熊楠の意味するところによると、単なる偶然の域を超えた中、発見、発明のことである。そして、その背景には（それを発揮するためには）“tact”が必要なのである。しかしながら熊楠は、この肝心の“tact”を「何と訳してよいか知れぬ」と言うのだ。

以下、本稿ではこの“tact”の語源を切り口に、熊楠の言説を概観し、深い身体的感覚、つまり〈触覚〉とはいかなるものであり、それが「やりあて」とどう関係するのかについて考察していく。

2 “tact”の語源

“tact”とは、一体何なのか。熊楠は、民俗学者の柳田國男（1875～1962年）に宛てた書簡の中でも、土宜への書簡と同じようなことを述べている。

されば数量の学識、万物に及ぼさぬ今日は、tact（何と訳するか知れぬが、練熟能ともいうべきか、石切り屋がよそむきて話しながら臼の目を規則通りに角度正しく切り、何の音調の定則も譜表も持たざる芸妓が、隣人のくだまく声に合わせて三線を鼓するがごときと tact という）ということ、もつとも肝心なり。東洋のことには tact まことに多し、西洋人にはこのこと少なし。

（1911年10月25日付柳田國男宛書簡）[往復書簡（柳田宛）：186]

熊楠は、ここでもやはり“tact”を「何と訳するか知れぬ」と述べている。そして、石工の事例に加えて、芸妓が三線を即興的に客の声に合わせて弾けることを挙げている。また、数量の学識だけで「世界」の全てが理解できるわけではないことがわかっている今日において、この“tact”を知ることこそ、最も肝要だという旨を述べている。いわゆる西洋近代科学の知を超えることを目指していた熊楠にとって、この“tact”という概念が非常に重要であったことは、この文章からもよくわかる。しかしながら、その肝心かなめの“tact”が何なのか、彼の文章からはいまいちはっきりとしてこない。熊楠は、“tact”による「やりあて」に関して、事例を挙げるばかりである。つまり、熊楠の言説にお

¹⁾ 熊楠は「やりあて」を「やりあてる」の名詞と言ってもよい、と述べているが、その語は彼の住む和歌山の方言辞典等にも載っておらず、おそらく彼独自の造語であると思われる。

いては、その「定義」がはっきりとは見えてこないのである。

例えば、辞書においては、“tact”は以下のように説明されることがある。

tact: the ability to deal with difficult or embarrassing situations carefully and without doing or saying anything that will annoy or upset other people. [OALDCE : 1593]

この辞書による定義では“tact”とは「困難で厄介な状況に、他者を苛立たせたり動揺させたりすることを言ったりしたりすることなく、注意深く対処する能力」のことだとされている。ちなみに、日本語では、現在のところ“tact”は「機転、思いやり、如才なさ」[小稲 1980 : 2147] 等と訳されることが多い。これらどれをとっても、それは一筋縄ではいかない心身の微妙な感覚であることがわかる。

さらに、この“tact”の語源を探ってみると、非常に興味深い事柄がわかってくる。この語は、ラテン語の“tactus”に由来し [CEDEL : 1064]、それは〈触覚〉を意味するのである²⁾。この事柄に関して、例えば、教育学者の篠原助市 (1876~1957 年) は、以下のように述べている。

タクト tact はもと tactus (触れる touch 感ずる feel) から導かれた語で、語義上、一定の地域にある一定の個人に接触したときに現れる、正しき行動の漠然たる感情を意味する。それは他との交わりにおいて、感情的に、正しきものに打ちあてる——タクトは「打ちあてる」という意味に用いられる時代もある——能力として直覚的であり、多分に藝術的である。[篠原 1948 : 62-63]

篠原は、“tact”は、「触れる」「感ずる」つまり〈触覚〉を意味するラテン語“tactus”から導かれた語であって、個人に「接触」したときに現れる漠然とした感情であるとする。そして、それは「接触」という他者との交わりによって感情的に、正しきものを「打ちあてる」ものであるとも述べている。さらに、それは多分に「直覚的」で「藝術的」なものであると付け加えている。

また、篠原は“tact”が「打ちあてる」という意味で用いられていた時代もあったと述べているが、ここで、我々が想起するのが、熊楠の言う「やりあて」であろう。「やり」とは「遣り」即ち一方向から他方へ移らせることであり、「あて」とは、「中て」とも書くように、まさに「的中」させることである。つまり「やりあて」とは「遣り中て」でもあるのだ。

しかしながら、熊楠の言説における“tact”と「やりあて」の関係は、微妙である。彼は、“tact”とは「やりあて」である (“tact” = 「やりあて」)、とは言明してはいないのだ。一方で、上記したように“tact”の説明の中で「やりあて」という語は出てくる。両者は、熊楠の中でどのような関係に

²⁾ 我々のよく知っている語として「コンタクト contact」がある。名詞としては「接触」、動詞としては「接触する」という意味である。これは“con”つまり「共に」という接頭辞に“tact”すなわち〈触覚〉が付いたもので、本来的に「共に触れ合う」ことを意味する。

あったのであろうか。これは、彼の文章自体が非常に錯綜しており、なかなか解釈が難しい。しかし、ここで“tact”をその語源に沿って〈触覚〉と理解するのであれば、「やりあて」は、この“tact”によって成される事柄であると思われる。逆に、「やりあて」によって“tact”が成立するということだと、普通に考えれば、意味が通らない。

何れにしても、ここで重要なポイントは、“tact”は、本源的に〈触覚〉と結びついたものであるということである。このことが、熊楠の“tact”延いては「やりあて」を深く知る鍵となるはずである。

3 熊楠の夢と“tact”

熊楠は、石工や芸妓の技を“tact”の事例として挙げている。そして、彼自身の事例としては、標本制作時の薬品の調合を挙げている。また、興味深いことに、以下に示すように、彼は、自身の夢による生物の発見（やりあて）も“tact”によるものであることを述べているのである。以下に、熊楠が示している事例を二つ挙げる。

一例をいわんに、数量のことは、予期たしかなれば例までもなし、tactのことをいわん。明治二十三年、予、フロリダにありて、ピソフォラという藻を見出す。これはそれまでは米国の北部にのみ見しものなり。され帰朝して一昨年九月末、吉田村（和歌山の在）の聖天にまいれば、必ず件くだんの藻あると夢見ること毎い度なり。…（中略）…されども、何にもとらずに半日を費いやせしも如何なれば、どんなものか、小児にでも見せて示さんと思ひ、とりて帰る。さて顕微鏡で見ると、全く夢に見しピソフォラなるのみか、自分米国で発見せしと同一種なりし。

（1903年7月18日付土宜法龍宛書簡）〔往復書簡（土宜宛）：311〕（下線一筆者）

さて、そんなら一例をまた引かんに、今度は本月五日の夜クラテレルスという菌（画にて見たることあり。実物、画よりはるかに大なるに驚く。後に画をしらぶるに縮図の由。予の一度も見しことなきところに記しおる）、那智の向山をさがせば必ずあるべしと夢見る。翌日、右の例もあるから、おかしなことに思いながら、向山をさがすになし。それから夕になり、帰途はなはだ艱苦、あるいは谷に墮つるの患うれいあるから、遠き路をまわり、花山天皇の陵という処をこゆるとき、この菌多く見出だす。これは予が見しこともなきもの、また、画だけは見しが、どんな地に生ずるものとも、何の木の下に生ずるものとも読みしことなし。今も読み得ず。（画のみにて何にもなきなり。右の大きさの付記別にあるのみ。）しからば、右のごときは tact というの外なし。

（1903年7月18日付土宜法龍宛書簡）〔往復書簡（土宜宛）：312〕（下線一筆者）

ここで熊楠は、ピソフォラやクラテレルスを、夢で見た場所に行き行って発見した（「やりあて」と述べている。そして、これらが“tact”によるものであると言っている。これらが「事実」であるかに関しては、ここでは議論しない。これらに関する「実証的研究」としては、武内善信の著作

が詳しい³⁾。本稿では、“tact”による「やりあて」の事例として、熊楠が「夢告」を挙げている点に着目したい。

熊楠は「夢告」によるこれらの発見（やりあて）を“tact”によるものだと述べている。上述の夢の中で、熊楠は、誰に「示唆」されたのかは述べていない。それは、彼の尊敬していた亡父・弥兵衛（1892～1892）、あるいは、夭折した彼の同性愛の対象者・羽山繁太郎（1868～1888年）やその弟・蕃次郎（1871～1896年）だったのかもしれない。熊楠は、同じように「夢告」等によってナギランという珍しい植物を発見していることを、いくつかの書簡や論考等で述べている。それに関する詳細な経緯は、拙稿「南方熊楠によるナギランの発見」（『「エコ・フィロソフィ」研究』vol.15 東洋大学 2021年）を参照にされたい。

“tact”という語が、ラテン語の“tactus”つまり〈触覚〉を由来とするということを鑑みた場合、熊楠の挙げる、土工や芸妓の技そして自身の標本制作時の薬品調合の事例は非常にわかりやすい。なぜなら、それらは、どれも人間の、特に手指という、まさに〈触覚〉を用いた行為だからである。しかし、彼は、夢による発見（やりあて）も“tact”によるものだと言うのである。これはどういうことであろうか。

熊楠は、非常に「リアル」な夢を見る人間であった。そして、彼は、生涯にわたって自身の夢を記録し続けた。また、夢から覚めた後（覚醒時）でも、夢と「現実」の区別がつかず、困惑することさえあった〔唐澤 2014 参照〕。それほどまでに、熊楠にとって夢は「リアル」なものであったのだ。その理由として、筆者は、彼が視覚的に夢を見ていたのみならず、〈触覚〉的にも夢を見ていた、あるいは、この〈触覚〉と夢とのかかわりに、かなり関心を抱いていたからだと推測している。事実、熊楠の日記における夢の記述には、〈触覚〉的な出来事に関する記録とその分析が非常に多い。

例えば熊楠は、以下のような記述を残している。

1903年8月13日 快

此朝、幻に岩崖に側立すと思ふ。足のそこ痒きほどに感ず。さめて見ればふとんのしは、乙の如くよれる上に足をおき臥したり。〔日記 2 : 369〕

これは、幻であったのか夢であったのか——。ここで熊楠は「幻」と述べているが、「此朝」「蒲団」とあることから、おそらく朝目を覚ましたときに覚えていた夢のことを記したものだと思われる。この夢で熊楠は、崖に立っており、足の裏が痒かったという〈触覚〉的な出来事を述べている。そして目を覚ましてみると、蒲団のよれたところに自分の足を置いていたので、これが原因ではないかと推

³⁾ 熊楠によるピソフォラやクラテルスの発見に関する実証的研究は、武内善信の『闘う南方熊楠—「エコロジー」の先駆者—』内の「南方熊楠における珍種発見と夢の予告」（pp.180-204）に詳しい。武内は、熊楠による日記や書簡、論考などの記述におけるこの「出来事」の相違を明らかにしている。しかしながら、ナギランの発見もそうであるが、筆者は、執拗なまでに熊楠がこれらの「夢告」に言及する背景には、彼の単なるパフォーマンスを超えた「意味」があったと考えている。即ちそれは、熊楠自身が「夢告」のような現象を強く信じており、またそれが大いに発揮される境位があることへの信頼を表明することでもあったと考えている〔唐澤 2021 参照〕。

測している。熊楠による夢の記述は、このような類のものが非常に多い。

熊楠の〈触覚〉的感觉に関する興味深い記述としては、例えば以下のようなものがある。

1913年10月14日 雨

此夜予ひとり臥しおる夢に、岡田満？来るを、豪猪に化し（昨夜大英類典豪猪の条）新座敷の椽下に隠んとするに、いかにして開くべきかを不知、問んと妻を呼ぶこと七八度にして、妻によびおこさる。次に又茶をくれといふこと七八声にして、下女ほんとうで有うかと妻にとふをきゝ、大に怒る。扱茶もち来れば、手にとり飲ねど飲んだ心地するなり。[日記4:310]

これは、夢の中で岡田満という人物が猪に変身して新座敷の椽下に隠れており、熊楠はそこを開ける方法がわからず、妻の松枝を七、八度呼んだというものである。そして、松枝に起こされた熊楠は、「茶をくれ」と言った。しかし彼は、まだ夢と「現実」の区別がついておらず、お茶を手にし、飲んでいないのに飲んだ気がしたという。夢うつつの中で、熊楠は、お茶が喉を通り過ぎた感覚を確かに持ったのだ。つまり、お茶が喉を通り過ぎる〈触覚〉的感觉を得ていたのである。

さらに興味深いことは、以下の一文を読んででもわかるように、熊楠は、喉で夢を見ることもあると考えていた点である。

1903年3月28日 雨

今朝早く起る。喉にも耳目とく夢みる力あることを感じ出し喜多幅氏へ認め、状一出す。

[日記2:335]（下線—筆者）

喜多幅とは、熊楠の友人で医師の喜多幅武三郎（1868～1941年）のことである。熊楠と同年の喜多幅は、和歌山中学校時代からの親友であった。喜多幅は、京都府立医学校（現京都府立医科大学）の眼科を経て、東京帝国大学医科大学産婦人科の選科を卒業した人物である。熊楠は、眼科に詳しい喜多幅であれば、視覚的な夢とは異なる〈触覚〉的な夢についても何かしらわかるかもしれないと考え、書簡を出したのであろう（なお、その書簡の行方および喜多幅から返信があったかどうかは不明である）。ポイントは、彼が、舌という味覚に関わる部分ではなく、食べ物や飲み物を嚥下するときに、その感覚を〈触覚〉的に受け取る喉という部位に着目していることである。

熊楠による、より明確な〈触覚〉的な夢あるいはヴィジョンとしては、例えば以下のような記述がある。

1904年4月1日 快、午後陰・半晴

灯消して暫時眠る内、頭辺に人多く来ると夢み、次に父と今一人座す。予父の膝前の衣を手でおし見るに抵抗力あり。常楠と予の頭になにかするやうにて、右の二人去て仏壇のふたより中へ入

るやうに消る。予一人となり、足を自ら幽霊の風して腰以下なくなり、おどすとみて其声にてさむ。左右の手各々ふとん及衣のしばにて行きつまり凹処につき入れありし。

[日記 2 : 421] (下線—筆者)

熊楠は、頭のあたりに大勢の人が来る夢を見た。次に亡父と今一人が座していた。熊楠がその父の膝前の衣を手で押してみると、確かに抵抗力があつたという。つまり彼はこの時、亡父を〈触覚〉的に感じ取ったのだ。

以上からも、熊楠の夢には、〈触覚〉が奇妙な形で多くかかわっていることがわかる。

例えば、〈触覚〉的な要素をもって、彼の夢はより「リアル」なものとなっていたとは言えないだろうか。我々は、熊楠のような、夢における〈触覚〉的な体験は少ないにしても、覚醒時において〈触覚〉を伴った出来事というのは、よく記憶に残っているものである。我々人間に限らず動物は、目で見ただけ、耳で聞くだけよりも、そこに手触りが加わった方がより「リアル」を感じ取るものである。

本節の最初に見たように、熊楠は、「夢告」による発見(やりあて)を“tact”によるものだと述べている。それは、彼にとって夢は、単に視覚的に「見る」だけのものではなく、〈触覚〉＝“tact”を伴うことが非常に多かったことに関連してくる。〈触覚〉と深く結びついた夢は、熊楠にとって“tact”の最たるものだったのだ。そもそも、「夢告」を实践する、つまり珍しい生物を発見する(「やりあて」)とは、基本的に視覚的なものかもしれないが、そこまでの道のり——例えば切り立った崖をよじ登ったり、それを避けるために遠回りをしたりすること——は、身体全てに関わる〈触覚〉的なものである。生粋のフィールド・ワーカーであった熊楠は、このような〈触覚〉が非常に鋭敏であり、また重視していたに違いない。そうしなければ、危険な森や林(那智山)におけるフィールド・ワークでは、最悪の場合、命を落としかねないのだ。

4 〈触覚〉と粘菌

ここでは、〈触覚〉がいかに重要なものであるかについて、熊楠以外の哲学者の言説を引きながら考察していく。

アリストテレス(Aristoteles, 前384～前322年)は、動物にとって最も根本的なものは〈触覚〉であると述べている。

ある動物たちは全ての感覚【視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚】を、他の動物たちはいくつかの感覚を、さらに他の動物たちは一つの最も必須な感覚、すなわち触覚だけをもっている。

[アリストテレス 1969 : 297] (【 】内—筆者)

人間は、通常五感(視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚)を持つとされるが、当然全ての生物がこの五感を揃えているわけではない。また全てを揃えていても、それらは種によって、それぞれ強弱がある。

昆虫や微生物では、五感の内いくつかだけを備えているものも多い。

アリストテレスは、この〈触覚〉を備えていない動物はいないと言う。つまりアリストテレスは、〈触覚〉を、動物を動物たらしめている最も根源的な感覚として捉えていた。

また、触覚的能力なしに他のもろもろの感覚は一つも備わらないが、触覚は他のものなしにも備わりうる。動物の多くのは、視覚も聴覚も匂いの感覚（＝嗅覚）ももたない。また、感覚的能力のうち、あるものは場所的運動の能力をもち、他のものはもたない。

[アリストテレス 1969 : 299]

アリストテレスのこの言説に従えば、〈触覚〉があつてこそ、他の四感は成り立つということになる。彼は、他の四感は、大元である〈触覚〉から分岐してきたものと考えたのである。

例えば、デリダ (Jacques Derrida, 1930～2004 年) は、この事柄をよりの確に述べている。

タクト
触覚は、最も受動的感覚、最も可動的ではない感覚（味覚と嗅覚）から最も「高次な」感覚つまり「機能的運動」（聴覚と視覚）を備えた感覚に至るまで、四つの他の感覚領域を覆い尽くしている。[デリダ : 295]

デリダは、ここで〈触覚〉＝“tact”こそが他の感覚を覆い尽くすようにしてあると言う。またデリダは、生物（動物）と〈触覚〉の関係について以下のようにも述べている。

有限な生物は、それ以外の感覚が一つもなくとも生き、生き残ることができる。視覚を持たず（「見」なくても光を感知できる）、また聴覚を持たず（「聴」かなくても音波を感知できる）、物理的もしくは生理学的変化——「感覚」はいつもこうした変化の結果なのだ——に対応する味覚や嗅覚を持たない多くの動物にも、こうしたことはあてはまる。ところが、いかなる生物も触れなければ、言い換えれば触れられなければ、世界の中で一瞬たりとも生き残ることはできない。有限な生物にとって触覚が「世界内存在」を意味するのは、まさにあらゆる「感性」概念の手前あるいは彼方においてである。触覚がなければ世界は存在しない。[デリダ : 269]

つまり〈触覚〉こそが最も根源的なものであり、デリダは、それこそが、動物にとって世界を存在させているものだと言う。視覚・聴覚・味覚・嗅覚を持たない動物はいても〈触覚〉を持たない動物はおらず、この感覚を持っていないものは、一瞬たりとも生きることはできないとさえ述べている。

では、五感に分節化される以前の〈触覚〉のみで生きている動物など本当に存在するのであろうか。当然、答えは Yes. である。しかも、熊楠が最も精力的に研究をした生物の中にそれは堂々と居を構えていた。——それが、粘菌である。粘菌の生活環における変形体と呼ばれる時期は、アメーバ状に広

がり這い回り、バクテリアなどを捕食する。粘菌には、視覚も聴覚も嗅覚も、おそらく味覚も存在しない。確実にあると言えるのは〈触覚〉のみである。粘菌の変形体は、まさに〈触覚〉＝“tact”で生きていると言える。その動態は、時に周囲を確かめるように慎重で、時に大胆で、そして時に愛撫するようにさえ見える。

熊楠は、昭和天皇へのご進講の際、表敬文に「粘菌の類たる、原始動物の一部に過ぎずといえども……」ということを書いた。しかし、この一文は、御用掛の生物学者・服部広太郎（1875～1965年）によって「原始生物」と変更された。それを聞いた熊楠は激怒したという〔大事典：95〕。熊楠は、明らかに粘菌の中に動物の動物たる所以、すなわち〈触覚〉＝“tact”を見ていたのである。つまり「原始動物」ではなく「原始生物」とすることは、動物である証でもある“tact”を蔑ろにする^{ないがし}ことでもあったのだ。熊楠にとって、服部によるこの変更は、「もつとも肝心」（1911年10月25日付柳田國男宛書簡）〔往復書簡（柳田宛）：186〕な“tact”を、ある意味において軽視されたことに対する怒りでもあった。

5 「区別」と“tact”

熊楠は、他者（対象）へ深く入り込んでいくことのできる人間であった。彼は、対象へ深く入り込み、まさに身も心もそれ自体に浸っていたのである。娘の文枝（1911～2000年）は、以下のようにインタビューに答えている。

——先生の集中力のものすごさは類例がないようにうかがっておりますが。

文枝 本を読んだり書きものをしているときは、八畳の離れにいますが、そこから一切出てきません。「めしも言うてくれるな」と、食事を自分にさせるなど言うのです。こちらも行かずにそのとおりにしておりました。いつ出てくるかわからないから用意だけしておきますと、そのうち出てきて「お前たち、わし今朝からめし食ったか」、自分が食べたか、みんな覚えているかと言うのです。「いや、まだ何にも」と言いますと「それはたいへんだ」と言いまして……。それぐらい没頭しておりました。〔文枝 1981：14-15〕

研究に没頭した熊楠は、寝食も時間も忘れることがあった⁴⁾。それは、熊楠自身のみならず側から見

⁴⁾ 通常、我々が持っている時間感覚は、過去→現在→未来という直線的な時間の矢に即している。そこには多分に「区別」の機能が働いている。現在とは異なるものを、現在から区別することで過去と未来は現出する。熊楠の持っていた「リアル」は、むしろ「今ここ」に全てが収められるという、通常の時間を超越したものであった。彼は、以下のような言葉を残している。

大日に取りては現在あるのみ。過去、未来一切なし。

（1903年8月8日付土宜法龍宛書簡）〔往復書簡（土宜宛）：335〕

過たるは過去、未来は未見なり。然し何れも実に現にあるなり。（1904年3月27日付日記）〔日記2：419〕

……時間と空間は云々といふもの、之を定りて動かすべからざると心得るも、そは科学上のことに止り、狂人などにはそんなことなし。…（中略）…無終無始なるのみならず、過現未来の差も無しと知り、心強く養生して成るままに為すの外なしと知れ。（1902年3月25日付土宜法龍宛書簡）〔高山寺書簡：264〕

これらの言葉からわかること、それは、熊楠が圧倒的な「リアル」を感じ取っていた時間とは、過去／現在／未

たり聞いたりした人物がそう感じる程、すさまじいものであった。柳田は、熊楠を述懐し、以下のような言葉を残している。

……ところが先生だけは一つの本を読み続けると其夜きつと其言語ばかりで夢を見ると言つて居られた。それほどにも身を入れ心を取られて、読んで居る。書物の言語に、同化して行くことの出来る人だつた。さうして又際限も無く、新古さまざまの国の書物を、読み通した人でもあつた。

[柳田 1991 : 385]

彼の「天才性」の一つは、間違いなくこの「没入する力」であった。熊楠自身は、この対象への深い没入を「直入」と呼んでいる。

事物心一切至極のところを見んには、その至極のところへ直入するの外なし。

(1904年3月24日付土宜法龍宛書簡) [往復書簡(土宜宛) : 393]

果たして、熊楠の言う「直入」とは、視覚のみで可能なものであろうか。それは、おそらく視覚のみならず聴覚や嗅覚、さらには味覚、それらを成り立たせている根源的な〈触覚〉＝“tact”を發揮することで真に可能になるのではないだろうか。研究対象へ、また外国語で書かれた書物の「世界」へ真に「直入」するには、単なる視覚情報のみに頼ってはいは不可能であろう。

例えば、熊楠の直筆によるキノコの図譜には、夥しいほどの情報が書き込まれているが、そこには、匂いや味なども多く記されている [菌類図譜参照]。もしかしたら熊楠は、キノコが乾燥していくときの音なども聞いていたかもしれない。そのようにしながら彼は、顕微鏡を用いながら、まさに触れるようにキノコを(勿論粘菌も)観察していたのだ。特に、顕微鏡は、人間の〈触覚〉的視覚を大いに刺激する装置でもある。それは、観察者が対象の内奥に入り込むことを加速させる装置でもある。

対象の内奥に入り込んだ時、我々が「現実世界」で保持している「区別」は溶解する。瞬間的であれ対象と同化したとき、我々は、そこに相互浸透性を感得する。そして、実は、〈触覚〉＝“tact”は、この相互浸透性を前提とするものなのである。例えば、哲学者の坂部恵(1936～2009年)は、以下のように述べている。

ふれるというもっとも根源的な経験において、われわれは、自-他、内-外、能動-受動という区別を超えたいわば相互浸透的な場に立ち合う。たとえば「人目にふれる」というような表現において、能動-受動、主体-客体の別はいまださだかではない。あるいはお望みならば両義的であるといってもよい。われわれは、いってみれば、そこでそれらの自-他、内-外、能動-受動をはじめとす

来といった区別を全て取り払った、まさに「今ここ now-here」であったということである。

る諸々の差異がそこから発生してくる、ないしはそれまで差異化の網の目の布置がカタストロフィックな編成替えを受けてあらためて立ち現れてくるその点、ないしは宇宙の力動性の一つの切り口とふれ合うのである。[坂部 1983 : 21-22]

つまり、触れるという〈触覚〉が発揮されている時、そこには、通常の能動／受動、主体／客体という区別はほとんどなくなり、我々は相互浸透的な場に立ち入るということである。この〈触覚〉の次元では、自他、内外などの区別や差異は曖昧となり、両極は超濃密に重なり合う。つまり、見る側／見られる側、聞く側／聞かれる側……といった区別以前の場こそが〈触覚〉の次元ということである。

私たちは通常、触れる側／触れられる側という区別があるように考えがちである。しかしながら、本来的な〈触覚〉の次元においては、実は、そのような単純な区別は成り立たない。そもそも「～に触れる」の「に」という助詞は、状態として「重なり合い」の意味をその背景に持っている。例えば、我々が「机にスマホがある」と聞けば、机とスマホが重なっている状態を思い浮かべるであろう。坂部は「ふれることは直ちにふれ合うことに通じるという相互性の契機」[坂部 1983 : 27]とも述べている。——何かに触れるということは、何かから触れられてもいるのである。この「転位」は〈触覚〉の最大の特徴と言えるかもしれない。坂部は、以下のように続けている。

この事実は、見るものと見られるもの、聞くものと聞かれるものといった様な主体と客体がはっきり分離されている他の四つの感覚に対して、ふれることだけが、ふれるものとふれられるものの相互嵌入、転位、交叉、ふれ合いといったような力動的な場における生起という構造を持っていることを示すものと見ることができるだろう。[坂部 1983 : 29]

坂部の言説を引き継ぐなら、触れることは、分節化以前の状態に入ることだと言えるだろう。坂部は、別の箇所で、「見分ける」(視覚)、「聞き分ける」(聴覚)、「嗅ぎ分ける」(嗅覚)、「味分ける」(とは一般的には言わないが、「利き酒」などのように味わい分けることはある)(味覚)とは異なり「触れ分ける」という言い方は成り立たないと述べている。つまり、触れるということは、「分ける」以前のものであり、その意味でロゴスの基本作用を超えてもいるわけである。

このいわゆるロゴス的な分節機能のさらに奥に入ることが、熊楠の言う「直入」である。そしてそこに開かれるのが、〈触覚〉 = “tact” の次元なのである。

6 まとめ

熊楠は“tact”を非常に重視した。一方で彼は、その語を「何と訳してよいか知れぬ」と言い、事例の列挙ばかりで、具体的に「定義」しなかった。しかし、この“tact”が「やりあて」という偶然の

域を超えた発見や発明・的中といった極めて創造的な事象に深くかかわっていることは、熊楠の言説からも明らかであり、彼の「天才性」を知る手がかりとなり得るはずである。そこで、本稿では、この“tact”という語が、ラテン語の“tactus”すなわち〈触覚〉に由来することを切り口として、熊楠の言う“tact”の事例を検証してきた。薬品調合や石工・芸妓の技は、まさに〈触覚〉をフルに発揮して成されるものである。それぞれは、特に人間の手指という〈触覚〉のなせる超絶技巧であり、的確なポイントをまさに「やりあて」ていると言える事柄である。また熊楠は、「夢告」による植物等の発見も、“tact”による「やりあて」であると述べている。本稿では、これは、熊楠自身の夢が、視覚のみの事柄を超えた、特に〈触覚〉にかかわることであったことを論じた。

熊楠は、夢から覚醒しても、夢の世界の出来事を引きずることがあった。つまり「区別」を前提とする「現実世界」と夢との差異が曖昧になってしまうことがあったのだ。このように対象へ、あるいは対象の世界へと深く入り込むことを彼は「直入」と呼んだ。深く入り込んだ先にある自他未分化な場所では、他者（対象）との深い交流（交感）がある。それは〈触覚〉の次元とも言えるものである。

坂部は、相互浸透性こそ、触れるという行為の前提にあると考えた。つまり、触れることは、分節化以前の状態に入ることなのだ。そして、他の四感の大元である〈触覚〉が最大限に発揮される時、我々は、自然の流れそのものを掴み取ることができる。

美学者の伊藤亜紗は、以下のように述べている。

自然が作り出したものの内部にある、生命や魂の絶えず動いてやまない流れ。この「自然のことは」を聞くことが触覚の役割であり…（中略）…視覚は表面にしか止まることができないのに対し、触覚はさらに奥に行くことができる。触覚は「距離ゼロ」どころか「距離マイナス」なのである。[伊藤 2020 : 75]

熊楠は、彼のいわゆる“tact”論の主意は「宇宙のことは、よき理にさえつかま^{あた}えなければ、知らぬながら、うまく行くようになっておる」（1903年7月18日付土宜法龍宛書簡）[往復書簡（土宜宛）：310]ということだと述べているが、これはつまり、上記で伊藤の言う「生命や魂の絶えず動いてやまない流れ」を一気に掴み取ることであり、さらに言うならば、その大きな役割を果たすのが〈触覚〉＝“tact”ということである。「事物心一切至極のところ」（1904年3月24日付土宜法龍宛書簡）[往復書簡（土宜宛）：393]、つまりダイナミックな流れそのものへ入るためには、視覚・聴覚・嗅覚・味覚を包摂するような、動物の根源たる〈触覚〉による「直入」が必要なのだ。それは、まさに「距離ゼロ」どころか「距離マイナス」になることでもある。そして、そこで掴み取った流れそのものの一部でも「現実世界」で顕現できたとき、人は「やりあて」たと言えることができるのである。

※ 本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「デジタル化資料による南方熊楠の学問構想の解読」（20H01198、研究代表：松居竜五）によるものである。

〈参照・引用文献〉

- アリストテレス「デ・アニマ（靈魂について）」高田三郎・村治能就訳『世界の偉大思想2 —アリストテレス ニコマス倫理学他—』所収、河出書房新社 1969 年
- 伊藤亜紗『手の倫理』講談社 2020 年
- Walter W. Skeat. *A Concise Etymological Dictionary of the English Language*. OXFORD UNIVERSITY PRESS, 1967. (CEDEL と略記)
- 唐澤太輔『南方熊楠の見た夢—パサージュに立つ者—』勉誠出版 2014 年
- 唐澤太輔「南方熊楠によるナギランの発見」『「エコ・フィロソフィ」研究』vol.15 東洋大学 2021 年
- 小稲義男『新英和大辞典』研究社 1980 年
- 坂部恵『「ふれる」ことの哲学—人称的世界とその根底—』岩波書店 1983 年
- 篠原助市『新教育学概論』富士書店 1948 年
- ジャック・デリダ『触覚、ジャン・リュック・ナンシーに触れる』松葉祥一・榊原達哉・加國尚志訳、青土社 2006 年
- 武内善信『闘う南方熊楠—「エコロジー」の先駆者—』勉誠出版 2012 年
- 萩原博光解説、ワタリウム美術館編集『南方熊楠 菌類図譜』新潮社 2007 年（菌類図譜と略記）
- Margaret Deuter, Jennifer Bradbery, and Joanna Turnbull. *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. OXFORD UNIVERSITY PRESS, 2015. (OALDCE と略記)
- 松居竜五・田村義也編『南方熊楠大事典』勉誠出版 2021 年（大事典と略記）
- 南方熊楠『南方熊楠日記 2』八坂書房 1987 年（日記 2 と略記）
- 南方熊楠『南方熊楠日記 4』八坂書房 1989 年（日記 4 と略記）
- 南方熊楠・土宜放龍『南方熊楠 土宜法竜 往復書簡』八坂書房 1990 年（往復書簡（土宜宛）と略記）
- 南方熊楠『高山寺蔵 南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893-1922』藤原書店 2010 年（高山寺書簡と略記）
- 南方文枝『父南方熊楠を語る』日本エディタースクール出版部 1981 年
- 柳田國男・南方熊楠『柳田國男 南方熊楠 往復書簡集』平凡社 1976 年（往復書簡（柳田宛）と略記）
- 柳田國男「南方熊楠」『近代日本の教養人』1950 年、飯倉照平・長谷川興蔵編『南方熊楠百話』八坂書房 1991 年所収